

〔清正記〕此後藤と云者は、日本松前之者なり、獵船に乘、風に放され、せい亥うへ著廿年彼所に居住するに依て、おらんかい口をも、日本口をも自由に遣ひよき通詞故、清正重寶せられ、則二郎と名も付、あなたかなたの案内を申付られし、せい亥うより天氣能時は日本の富士山殊之外近くみえ申候、彼所よりはひつじさるにあたり、松前より北なり、

〔松屋筆記六十一〕富士山異國より見ゆると云説并長白山

高麗陣日記上卷丁サセルトウスヲ生捕事ノ條に、ヲランカイより、天快霽の時は、未申にあたり、日本ノ富士山近ク見ユル也とあり、清人遂安ノ方象瑛渭仁が封長白山記に、登一山升樹而望遙見遠峰白光片々、長白山也云々、志稱長白山横亘千里、高二里、巔有潭、周八十里、南注鴨綠江、此流混同云々とあれば、此長白山を富士山と見まがへたるにやありけん、

〔丙辰紀行〕富士山

富士山の名、ひとり我朝に鳴るのみならず、遠く中華まできこゆ、赤人が歌は萬葉にのせ、都良香が記は文粹に見えたり、徐福、藥を尋ねてこの山にとゞまり、是を蓬萊山と名づくる事は、義楚が帖にあらはし、六月雪花飄素毳、何所深林覓白鷗、といへるは、宋濂が曲にあらずや、加之羽客釋流の此山に跡を残す事は、役處士がはじめて攀躋りしより以來、空海、圓珍、岩石をきざみて佛軀を彫るもの、山上に多かり、白衣天女の形をあらはし、淺間大神の跡を垂まします、誠に我朝無雙の名山なり、近代叢林の詩僧、この山を題せし中に、富士千仞雪嶮嶒、幾度思登病未能、送汝錫飛三伏裏、歸來分我一壺水、といへるは信義堂なり、大地撮來無寸土、當空還見此山成、海澗纔浸半邊影、多少漁舟載雪行、といへるは岩惟肖なり、六月雲間積雪新、東遊未踏玉嶙峋、畫師今有移山力、一洗京塵困暑獨白頭、といへるは岩惟肖なり、六月雲間積雪新、東遊未踏玉嶙峋、畫師今有移山力、一洗京塵困暑人、といへるは惺瑞岩也、富士峯宇宙間、崔嵬豈獨冠東關、唯應白日青天好、雪裏看山不識山、といへ